どうせこの世はそんなとこ 第三話

柏 戸 義 道（事務長補佐）

やれやれ，三度も続けて頼まれようとは夢にも思わなんだ。これまでの話が少々抹香臭かったので，このたびは少しくだけたものにするつもりである。早速，草葉の陰から和尚を呼び戻すことにする。

『柏戸さん，「顔問答」という話をご存知かの？　顔の中で席の上下をめぐって大もめにもめ，とうとうお釈迦様に聞いてもらうことになった。まず，口が吠えた。『わしは一日三度もメシを咀嚼し，味わい，さらにモノも言う。それに鼻が調子の悪いときには代わりに息もして四役も五役もこなしとる。ところが，鼻は息をして，匂いを嗅ぐだけの二役じゃ。　それにわしが調子悪うなっても代わりにうどんの一つもすすってくれるわけでもない。その鼻がわしの上に鎮座し，中には行儀悪う大胡座をかいとる奴がおる。不合理でしょうが。』　これを聞いて鼻が反発した『それなら，わしにも言い分がある。目の奴をみろ。　奴はものを見るしか能がない。しかも一日の三分の一はサボって寝とるが，それでもわしの上におる』言われて眼曰く『わしにも一口言わせてもらおう。わしの上に眉がおるが，奴は何もせず一日中座っとるだけじゃ。格好でも良ければじゃが，中には頼りない八の字やゲジゲジの様な飾りにもならん奴もおる』　おしまいに眉が静かに曰く『あなた方がそのような思いでおったとは知らなんだ。わしは別に上下にはこだわらん。どうぞお釈迦様，御意のままに…』　お釈迦様，ややあって曰く『よう分かった。それでは明日の朝から逆さにしてやろう』　一夜が明けた。早速，朝の味噌汁を飲もうとしたが，どうにも勝手が違うてうまく口に入らん。当たり前じゃ。眼が口の上にあるから食べ物が見え，うまく口に運べるんで，逆さじゃったらうまく行くものではない。　案の定，手元が狂うて味噌汁がダラダラこぼれ，すぐ下の，穴が上に向いて着いとる鼻の中に流れ込んだ。息もできん。　さらに溢れ出たやつがその下の眼に入る。眼は痛うて開けておれん。　しまいに，その下の眉に引っ掛かって，もうワヤクチャになった。

たまりかねて，早々にお釈迦様に詫びを入れて元に戻してもろうた。　さて，この話は「この世の諸々の事象は然るべき原因と条件によって創り出されておるものであって何一つ無駄もなければ不合理もなく，とうてい浅智の及ぶところに非ず」との戒めの寓話じゃが，まこと，人間が作った制度や仕組みは間違いが多いが，諸法の実相（この世のあるがままの事象）はそのまま恭敬感謝の他はない。　口や鼻が犯したような過ちを仏法では「無明（無知のため諸法の理に暗いこと）の為せる業」と言う。この無明が我執（我が我がと思う心）や貪欲（欲をむさぼること）を生み，やがて，苦の所縁となる。　何かを為しても，その見返りを求めない人を「無所得の人」と言うが，この場合は「全く収入の無い人」ではなく，「見返りを求めない人」を言う。エライ違いじゃから間違えんように…。　柏戸さんも「無所得の人」になってもらいたいものじゃ。もちろん，後の方ですぞ。　「全く収入の無い人」になられたんでは，寺の寄付を頼めんでのお…ワッハッハッハ。さてと，今宵は長居をすまいと思うておったんじゃが…。お邪魔さんでした。

では，ごゆっくらとおやすみなされ。』

学生諸君，当初の「くだけるつもり」がはずれて，またまた抹香臭くなってごめんなさい。

『解りにくかった』って？　無理もない。書いた小生自身がよく解っとらんのじゃから。

おしまい

総合科学部を想う

梶 籐 耕 平（大学院社会科学研究科１年）

「私は一体何に関心があるのでしょうか，私にとって何が興味のあることなのでしょうか」という問いかけを総合科学部生は一度は行っている，と私は考える。この問いは私なりに次のように解釈される。「私にとって，生きる目的とは何でしょうか，私はどのように生きて行けばいいのでしょうか」。このように極めてプリミティブな問いかけが，本人にはそれとは気づかないまでも，繰り返し問いただされる瞬間が必ず存在するはずである。なぜなら，総合科学部という学部の仕組みが，そのような問いかけを学部生に突き付けるからである。

総合科学部に入学して，膨大な知の領域を浮遊することになる我々は，ただ，興味関心の広がるままに漂うだけでは済まなくなる。ある段階で，この学部は「卒業論文」という形に向かって，我々に一つの問いを迫るのである。つまり「あなたは何をしたいのか」という。総合科学部のおもしろさ（あるいはやっかいさ）は，この問いが定められた狭い専門領域の中で行われるのではなく極めて広い知の領域の中で行われることである。それゆえに，この問いかけは，先に述べたようにそれ自体「何を学ぶか」「何のために生きるか」というレベルの問いまで向かう可能性を秘めているのである。

しかし，私を含めて，一度は問いかけられるこの問いをたいていはそれほど深く考えず，最終的には面白そうだ，という直感に頼って，促されるままにコース選択を行い，なんだか気の合いそうな先生を見つけてそこの研究室に転がり込んで，なんとなく面白そうなテーマを見つけて卒業論文を書き上げると，内容について先生に散々叩かれて，少し落ち込んで，それでもさっさと卒業して行く。そして卒業証書を見てふと思うのである。「俺は４年間で何を勉強したのだろうか」と。心に空しい風が吹く。

一方，先ほどのプリミティブな問いかけをより突き詰めた形で行えた者は，膨大な知の領域を，「いかに生きるか」という自らへの問いかけを羅針盤にしながら歩み始めることができる。しかし，彼らとて前途揚々ではない。彼らの前に立ち塞がるのは「専門性」という壁である。しかも彼らに残された時間は少ない。そして，自らの課したようなプリミティブな問いかけは，短い時間でそれほど収斂される事なく卒業論文という一つの形に無理やり押し込められる。結局先と同じように先生から内容について散々叩かれる。不充足感を抱えたまま卒業証書を見て同じようにふと思う。「俺は４年間で何が学べただろうか」と。しかし，彼らの心を空しい風が吹いたかどうかは，分からない。

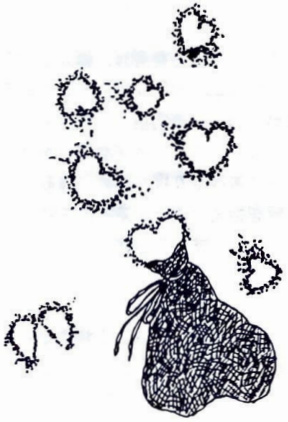
少し強引に，二つのタイプに分けてしまったが，もちろんこれは私の単なるお話である。しかも人文系出身の私の話で，これが自然科学系だとどうだか知らない。またこのことがいいことかどうかも言明は避けたい。ただ一つ，「広大そうかは，世界に一つ」などとのんきに言ってはおれないだろう。

近頃の私の読書傾向

足 立 匡 義（数理情報科学コース　助手）

私は読書はあまり好きではなかった。本を読むのが遅いからだ。これは性分の問題である。一字一句飛ばさず読まないと気がすまないのだ。速読術について書かれた本があるので，それを読んでみようかとも思うのだが，その本を読むのが遅いので，途中で挫折してしまう有り様だ。いや，これは冗談である。

読書を好まぬ私だが，この頃よく読むジャンルがある。それは推理小説である。小学生の頃には，江戸川乱歩氏の作品を小学生向けに書き直されたもので少しだけ読んだ。表紙の絵がおどろおどろしかったため，敬遠して読んだのはほんの数作だけだが。またテレビの2時間ドラマの推理物は好きだったので，よく見ていた。赤川次郎原作「三毛猫ホームズ」シリーズや内田康夫原作「浅見光彦」シリーズなどが好みであった。話が好みだったのではなく，好きな俳優が演じていたから，という理由が大きい。それに影響され，原作の小説の方も結構読んだ覚えがある。しかし，そのシリーズも演じる俳優が替わり，自分の興味もそれで失せたので，それ以降はつられて小説も全然読まなくなった。



それから数年間のブランクがあり，私が大学生だった頃，推理小説にハマるきっかけにぶち当たる。たまたま私の友人が2つの作品を薦めてくれたのだ。綾辻行人著「十角館の殺人」と島田荘司著「占星術殺人事件」である。私は，綾辻行人が私の母校の京大出身者という理由だけで，「十角館の殺人」を先に読んでみた。実に素晴らしかった。それまでに読んできた推理小説があまりにも少なかったのがその原因なのかも知れないが，犯人が判明する時点で鳥肌が立つほど驚かされた。私は作者にすっかり騙されてしまったのだ。騙されないよう一字一句逃さずに読んだのに。このような体験は初めてだった。続く「占星術殺人事件」でもやっぱり私は作者に綺麗に欺かれた。このダブルパンチですっかり推理小説にハマったのだ。

ただ単に推理小説と書いたが，実はこれらには「本格」という冠が付く。事件の論理的解決という推理小説の核となる部分を前面に押し出すものと考えてもらえば良いだろうか。これは大抵売れ筋とは異なるけども。単なる謎解き小説と侮るなかれ。名探偵の推理をお説ごもっとも，と素直に聞いているだけではつまらない。私にとって，推理小説とは作家との「戦い」を挑む「場」なのだ。負けず嫌いの私としては，作家に負けると悔しいのだが，作家にしてやられた作品の方がはるかに評価が高い。まあ当たり前のことだが。皆さんも「本格推理小説」を読んで，作家に欺かれる快感を味わってみては如何でしょう。

最後にこれらの小説は社会に悪影響を及ぼすものではないことを断言しておく。

マチは生きている

西 村 雄 郎（社会科学コース）

「マチは生きている」。

この一文は，私が大阪市近郊の「文化」住宅密集地域の町内会を中心とする地域づくり活動を調査し，生まれて初めて書いた雑誌掲載論文の冒頭に書いたものである。この論文は，自分の手と足で現実社会をつかまえたくて学生時代に指導教官に無理を言って大学院の調査に参加させてもらって，やっと書いたものである。自分の将来へ何の展望ももてなかった修士時代の私にとって，この論文は当時の私のすべであり，この結果，自己満足としか言えない陳腐な文章がこの論文の初頭を飾ることになったのである。

しかし，現在まで「町内会」を中心とする地域住民組織の研究を続けてきた私にとって，この調査がその後の研究の基点となっていることは紛れもない事実である。

私の中には今でも調査で歩いた密集住宅地のあの暑くるしい夏の記憶が残っている。「文化」とは名ばかりの6畳と4畳半2間の風通しの悪い暗い木賃住宅の部屋で両親の帰りをまつ幼児。その子たちに何かと気を使う近所の老夫婦。そこには集団就職列車に揺られ都市生活をはじめた人々の様々な生活の織り込み合いがあり，高度経済成長のなかで現れた様々な生活問題を自らの手で解決していこうとする人々の姿があった。そして，これらの人々の生活の結節点となったのが「町内会」なのである。

ところで，近・現代における日本の都市形成過程をみると住縁・地縁が都市来住者の生活確立に大きな役割を果たしてきたことがわかる。例えば，石井県能登地域出身者が地縁を媒介して大阪市や京都市で浴場経営を行い，両市の浴場経営者の半数近くがこの地域出身者であるという事実がある。さらに，大阪市や川崎市の特定地域に居住する沖縄の人々の間に強い社会経済的扶助関係がみられることも報告されている。また，「町内会」や同郷集団といった地域・住縁集団が阪神大震災を住民生活復興に大きな役割を果たしている。この意味で，地縁・住縁は都市来住者にとって異郷の都市において新たな社会関係を築き，生活を確立するための「文化資本」となってきたのである。

震災後に私が神戸市長田区で見た「がんばれ奄美同胞」という垂れ幕も，10万人と言われる神戸市に居住する奄美地域出身者の生活の拠点として建設され，劫火の中かろうじて焼け残った奄美同胞会館に掲げられたものであった。経済的な貧困と鹿児島本土における「島」差別の前に，神戸に移り住んできた人々が，築き上げてきた生活はいかなるものであったのか。その生活は同胞との係わりの中でどのように再建されるのか。私はこの人々の生活関係を日本都市の特質を明らかにするためにみつめていきたいと考えている。

震災の被害の中で，今も神戸の「マチは生きている」ことを祈りながら。

卒業論文題目紹介

学生氏名	(指導教官)	研究題目
人間文化コース		
稲田　博之	(中村　裕英)	イギリス中世社会の民衆思想　－ロビン・フッドを中心とした民間伝承からの考察－
今永　　綾	(水島　裕雅)	アメリカ映画にみる日本人像
岡本　　元	(品川　哲彦)	教育される者　－学校・社会・価値観－
尾崎　良一	(青木　孝夫)	吉川「三国志」の真価　～発展する『三国志』～
川野元佐枝子	(吉田　純子)	現代の家族像について　－ひこ・田中の作品を基に－
菊水　　浩	(佐藤　正樹)	樹木象徴に関する一考察　－「グリム童話」を手がかりとして－
近藤　　学	(西村　雅樹)	ネットワーク社会論
佐賀　伸昭	(品川　哲彦)	自由と規制　－喫煙と禁煙を手がかりに－
佐野　明子	(吉田　純子)	日米のいじめの類似点と日本の小学生のいじめに対する意識　－ Judy Blume. *Blubber* をめぐって－
篠崎　陽平	(古東　哲明)	ルーマン理論の研究
首藤　三世	(品川　哲彦)	病気の意味　－病む者と病む者をとりまくもの－
竹永真規子	(小島　　基)	日本の国際交流について　－福岡・広島の現状を中心に－
谷　　俊幸	(青木　孝夫)	マンガにおける終末論的思考
寺元　洋介	(島谷　　謙)	賢治童話の中に見る異界
道関　文恵	(圀府寺　司)	写真における変身　－森村泰昌の作品における性差の考察－
中川　正史	(西村　雅樹)	山際淳司論
永島　瑞穂	(西村　雅樹)	映画における都市表現　－ウディ・アレンとニューヨーク－
福井　大輔	(佐藤　正樹)	いかにして「魔女」は殺されたのか
増永　　玲	(品川　哲彦)	遺伝子操作は許されるか　－自己決定を観点として－
馬田　　勉	(三木　直大)	現代中国のジェネレーションギャップ　－文学・映画を通して見る世代間の思想の相違－
宮坂　浩二	(原　　正幸)	唯識の哲学
村上　とよ	(品川　哲彦)	病気とその社会的意味
山田　幸子	(水島　裕雅)	映画を通して見る日本人像　～「１２人の優しい日本人」を中心として
八幡　洋美	(水島　裕雅)	島田雅彦論　－「季節移住」を中心とした作品をめぐって－
渡邊　高志	(青木　孝夫)	本宮マンガのメッセージ性　～主人公の特徴をもとに～
片岡　　剛	(齋藤　忠資)	脳と意識
岸本　孝子	(古東　哲明)	サイケデリック・リアリティ　－サイケデリック・シャーマニズムにおける「ヴィジョン」の探求－
藤田　　聡	(青木　孝夫)	戦後の「おもちゃ」　－商業玩具と戦後社会の変遷に即して－
地域文化コース		
石川　文子	(崔　　吉城)	アメリカにおけるヒスパニックのバイリンガル教育
猪村かおり	(崔　　吉城)	ジプシーについて　－迫害の歴史とその民族性－
岡嵜麻祐子	(崔　　吉城)	「沖縄の人々の日本観」　－伊波普猷の持っていた日本のイメージ－
河村　昌俊	(佐竹　　昭)	攘夷運動のひとつの意義　－木戸孝允を題材として－
菊田更弥佳	(鹿野　忠生)	アメリカ経済と貿易摩擦
桑島有賀里	(崔　　吉城)	カトリック世界の祭りに関する一考察　～スペインを中心に～
坂本　宗一	(長田　浩彰)	18世紀の西ヨーロッパにおける農村社会の発展　－農業革命と人口増加との因果関係－
山藤　夏郎	(朝倉　　尚)	『太平記』作者論
仙田　朋子	(崔　　吉城)	新宗教のイメージ
寺岡　利恵	(吉村慎太郎)	モンゴル独立過程におけるボグド・ハーン政権
冨谷　浩一	(長田　浩彰)	世紀転換期ドイツの青年運動　－ヴァンダーフォーゲルとは何だったのか－
野崎　淳子	(崔　　吉城)	シンガポールにおける高層公共団地政策と国民意識の変化
日野恵美子	(朝倉　　尚)	『枕草子』に見られる仏教関連場面の特質
藤田　紀子	(崔　　吉城)	「沖縄の祭礼と社会」　－沖縄の網引儀礼について－
細江　良子	(楠瀬　正明)	中国農村改革の行方　－地域格差から見た農村問題－
安永　虎吉	(崔　　吉城)	現代日本の教育－家庭教育のなかのしつけ－
吉川　風人	(鹿野　忠生)	アメリカ自動車産業地位低下の諸要因
吉田　千春	(佐竹　　昭)	稲荷信仰の研究　－稲荷社の成立とその性格－

和田　恵子	(崔　　吉城)	外国人と日本社会　－日米の外国人管理に関する比較研究－
蟹　　博文	(岡本　　勝)	ジェームズ・ディーン　～青春のシンボル～
古江　慎二	(崔　　吉城)	イギリスの近代スポーツの歴史と精神
渡邉　千秋	(村田　晃嗣)	W．E．B．デュボイスの思想　－アメリカ人であることと黒人であること
和田　耕作	(長田　浩彰)	ドイツ第３帝国における「安楽死」政策の考察
山元　恵子	(楠瀬　正明)	マレーシアにおける華語教育と華人社会について
森川　良哉	(樫原　　修)	西脇順三郎小考　～その「関係性」の論理を中心に～
社会科学コース		
青木　紀子	(秋葉　節夫)	歴史的景観保全活動の展開に関する一考察　～広島県竹原市を手掛かりにして～
池田みち子	(岩田　賢司)	西岸・ガザにおけるパレスチナ人意識の形成　－イスラエルの占領政策の観点から－
井上　紀代	(伊藤　護也)	瀬戸内法20年－功罪と今後の展望
植原　美和	(材木　和雄)	多様化する葬送形態と墓意識の変容　－葬送の自由を求める運動を事例として－
後田　　桂	(松岡　俊二)	歴史的景観に対する住民の保全意識に関する研究　－福山市鞆町の住民アンケート調査－
大西美紀子	(秋葉　節夫)	現代の農村地域における高齢者福祉　～東広島市東高屋地区社会福祉協議会活動を事例として～
岡田　博己	(松岡　俊二)	日本の政府開発援助の経済的効果に関する研究　－海外直接投資の決定要因分析を中心に－
緒方　秀樹	(田村　和之)	薬害事件と国の責任　～スモン訴訟を中心として～
奥田真須美	(富井　利安)	環境アセスメントの法制化に関する一考察
奥山　敬子	(石倉　康次)	子どもを主体ととらえた児童福祉のあり方についての一考察
梶藤　耕平	(石倉　康次)	阪神・淡路大震災におけるボランティア活動の参与観察報告
小鷹狩新治	(松岡　俊二)	中国におけるエネルギー利用と大気汚染に関する研究
桜井　邦彦	(岩田　賢司)	米国通商政策におけるＵＳＴＲの役割　－日米摩擦を事例として－
佐藤　典子	(石倉　康次)	地域のミニコミ誌と都市コミュニティの関係性についての一考察　－地域雑誌「谷中・根津・千駄木」とその地域を事例として
篠崎まさみ	(秋葉　節夫)	大学立地と学生街形成に関する一考察　－下見学生街づくりを事例として－
下田真由美	(奥村　和久)	韓国企業の対外直接投資　－その背景と実態－
高村　麻美	(舟橋　喜惠)	原爆投下をめぐるヘンリー・L．スチムソンの役割　－核兵器管理をめぐって－
滝口　幸典	(市橋　　勝)	情報サービス産業の現状と展望
田中　綾子	(富井　利安)	大気汚染対策の法規制と政策展開　－自動車排ガス汚染を中心に－
田村　幸子	(田村　和之)	都市計画　～用途地域の変更とその効果～
藤原　里子	(石倉　康次)	痴呆症の社会的イメージ　－小説の分析を通して－
三浦　素子	(浜渦　哲雄)	東インド会社の行政官育成　－２つのカレッジ－
溝添　恵子	(伊藤　護也)	環境行政における一考察　－広島空港周辺地域を事例として－
宮宇地理絵	(田村　和之)	死刑制度を問う　－社会に死刑は必要か－
宮園俊二郎	(秋葉　節夫)	中国地方における“地域づくり運動”の可能性　～「中国・地域づくり交流会」を手掛りに～
本園　正治	(市橋　　勝)	日本におけるコンビニエンス・ストアの展開過程
和田ひとみ	(石倉　康次)	老人ホームの問題と改善方向についての一考察　－祖母の生涯を通して－
甲斐健太郎	(舟橋　喜惠)	ヒロシマの意味を問う　～大江健三郎の想像力論をもちいて～
外国語コース		
伊藤　美紀	(小川　泰生)	変動する中国社会と離婚問題
太田　紀子	(谷本　秀康)	THE ANALYSIS OF THE DEGREE OF RECOGNITION OF JAPANIZED ENGLISH WORDS AMONG JAPANESE STUDENTS
河崎　文江	(谷本　秀康)	The comparison of the Meanings of Head.Face and Eye between Japanese and English
小島　　准	(澤田　　肇)	スタンダール『パルムの僧院』における主人公ファブリスの恋人達　－サンセヴェリナ公爵夫人とクレリアを中心にして－
児玉　理佐	(小林ひろ江)	A study of Japanese University student's Use of Request Strategies:JJ students vs JE students.
後尾　深雪	(井口　容子)	日仏両語における外来語について
坂井　美鈴	(澤田　　肇)	仏領ポリネシアにおけるフランス核実験非核・独立問題に関する考察
品川　典子	(井口　容子)	フランス語における数量詞遊離について
佐藤　幸恵	(小野　光代)	Tills Streiche
末永　由希	(小川　泰生)	中国語における外来語の研究　～とくに「分岐現象」の現状について～
高橋　　環	(ｽﾀｱｰﾄ、ﾋﾟｰﾀｰ ﾏｯｺｰﾙ)	THE PHONOLOGY OF WORD AND PHRASE SHORTENING IN JAPANESE

武田　裕子　（西田　　正）　Field-Dependence/Independence As Learner's Factor in Second Language Acquisition
田中　一誠　（小川　泰生）　日中オノマトペ研究　－動詞の細分化に関して－
谷渕　茂樹　（シュライナー，C.S）　AMERICAN INTERPRETATION OF CHINESE MODERNITY:An Analysis of the Historical Writings of John K.Fairbank and Benjamin I.Schwartz
中野絵里子　（伊藤　詔子）　A Cultural Study of Witches' Sabbath
中元　理絵　（山崎　直樹）　中国でいきる俳句
沼田　庸宏　（岩倉　國浩）　A SYNTACTIC STUDY OF ENGLISH ADVERBS
福田　　敦　（山田　　純）　Effects of Motivation and Learning Strategies in Learning English as a Foreign Language.
前田　美紀　（伊藤　詔子）　The World of Paul Auster:Focusing on Father－Son Relationship
宮内　晴美　（ヒボウズ・ジャネット風D.）　The Role of Background Knowledge and Schema in Listening Comprehension
柳生　洋子　（山崎　直樹）　中国の沿岸地方で形成されたピジュ英語に関する考察
田中　　淳　（谷本　秀康）　The characteristics of Australian English
吉田　和幸　（大山　茂之）　Nelly Dean as a character in *Wuthering Heights*

数理情報科学コース
鈴木　雅和　（乗田　正秀）　釣り合い型要因計画の解析
中岡　範之　（西井　龍映）　異なる解像度を持つ画像の重ね合わせ
池野　　剛　（山縣　敬一）　画面上の操作によって自動的に制約を推論するグラフィカルエディターの作成
辻田　栄資　（阿賀岡芳夫）　コーシーの定理と変形する多面体
森田　佳史　（乗田　正秀）　直交配列と均斉配列の制約数

物質生命科学コース
市川　貴之　（永井　克彦）　２次元格子上の散乱問題
江川　芳孝　（星野　公三）　シミュレーションによる水の構造研究
奥原　大輔　（武田　隆義）　X線小角散乱によるイオン性両親媒子混合物系の構造の研究
梶山　泰之　（手島　圭三）　光合成光化学系II複合体　～二量体と単量体の単離について～
公文　奈弥　（清水　典明）　間期核の出芽を介する微小核形成機構
佐伯　　剛　（上領　達之）　微生物細胞間で行われる空間伝達性シグナリングに関する変異株の単離
妹崎　淑恵　（浴野　稔一）　銅酸化物超伝導体 Bi2 Sr2 CuO6＋y の電子状態密度の磁場効果
武田　淳子　（岡野　正義）　中国産イチイ *Taxus chinensis* の成分研究
田中　裕子　（宗岡洋二郎）　大腸菌による一酸化窒素合成酵素の大量発現とその精製
筒井　智昭　（藤井　博信）　ナノ構造化したMg系合金の水素化特性
冨田千世子　（戸田　昭彦）　高分子のガラス転移点近傍における熱的性質と構造形成
福島　雅雄　（深宮　齊彦）　中国産イチイ *Taxus yunnanensis* の成分研究
藤田　美典　（宇田川眞行）　CeRuSbのラマン散乱
藤中　大三　（山下　和男）　光増感反応による半導体ポリマーの光電的機能の傾斜化
藤村加代子　（赤堀　興造）　光合成光化学系IIの研究　～二量体と単量体の単離とその性質について～
堀田　清隆　（松田　正典）　宇宙第４の相転移後の原子核組成のシミュレーション
松下　弘仁　（小南　思郎）　ウシ副腎皮質のステロイド生合成調節因子Ｓ＋ＡＲのクローニングとその発現
横内恵利子　（河原　　明）　両生類消化器系の変態における組織再構築の解析
渡邉　裕美　（内山　敬康）　ミトコンドリアＤＮＡの微小核への濃縮
渡辺　陽子　（田村剛三郎）　液体セレンの光誘起現象の研究
大橋　功二　（播磨　　裕）　電界効果測定による分子固体膜の電子物性評価
田川　征二　（彦坂　正道）　液晶性高分子 BB6 の「液晶化」メカニズム
山神　武志　（好村　滋洋）　C12E5/n-octame/H2O 系の構造相転移の電気伝導度測定による研究
大井　健司　（赤堀　興造）　光合成光科学系II研究におけるレーザーフラッシュ分光法ソフトの作成

自然環境研究コース
網屋　　香　（藤原祺多夫）　キレート樹脂濃縮/ICP－MSによる降水中の希土類元素の定量
石川　千穂　（於保　幸正）　低度変成岩に含まれる黄鉄鉱の電子顕微鏡観察
上村　千晶　（櫻井　直樹）　カボチャ下胚軸におけるブラシノライドの伸長促進作用の機構解明
内野　　誠　（櫻井　直樹）　セルロース合成酵素関連タンパク質についての研究
大財　順子　（根平　邦人）　アカマツ枯損林からブナ科広葉樹林への林相転換に関する生態学的研究

岡田　義朗　（開發　一郎）　土壌地表面薄層の水分分布特性
小川　晶子　（中根　周歩）　温度環境の異なるコナラ三林分の植生構造，現存量及び機能量の比較
亀山　慶晃　（根平　邦人）　ホンシャクナゲ固体群の構造と繁殖特性
河野　斉治　（本田　計一）　真正アゲハ属の寄主転換を規制する化学的要因に関する研究
川辺　朋章　（早瀬　光司）　廃棄物処理場における物質収支とその行方に関する研究
木村　宣仁　（佐久川　弘）　瀬戸内海海水中におけるアルデヒドおよびケトンの測定
久木田光紀　（開發　一郎）　黒瀬川流域御園宇谷底平地の地下水水質と流動
上瀧丈太郎　（早瀬　光司）　公共空間における散乱ごみの実態観測とその対策に関する研究
里村多香美　（堀越　孝雄）　二種のマメ科草本の成長と栄養塩獲得に対する酸性雨の影響
重谷　洋子　（設楽　惣助）　河川及び地下水における硝酸性窒素について
鈴木　祐子　（設楽　惣助）　排水の生物学的浄化と再利用　－窒素除去能の向上－
田中　淳一　（福岡　義隆）　林内雨，林外雨及び樹幹流における雨水のイオン特性
坪井　直子　（中根　周歩）　大気汚染による環境ストレスと樹木のエチレン発生
中井　　豪　（於保　幸正）　三段峡の地形形成史
長沢里絵子　（福岡　義隆）　北半球におけるオゾン量分布の経年変化に関する気候学的考察
野村　和信　（中越　信和）　可変クランプ法を用いたエコトープの空間分布様式の分析
濱崎恵美子　（海堀　正博）　土石流来襲前兆現象についての研究
本田　陽子　（日下部眞一）　遷延性意識障害の子供と家族との相互作用について
－西原家の例から－
増田　直樹　（佐久川　弘）　天然水および飲料水中の過酸化物の分布および生成メカニズムに関する研究
峯松　浩史　（林　　七雄）　モンキチョウの寄主選択に関与するアレロケミカルの研究
宮本　陽子　（吉川　友章）　地方小都市における気候特性
向原　真由　（堀越　孝雄）　マツタケ生産のため再整備されたアカマツ林の生態学的研究
吉野　英城　（吉川　友章）　複雑地形上の気流・乱流構造の測定解析
渡邉　園子　（中越　信和）　私有林地域の植生資源と社会環境
岩男　忠明　（海堀　正博）　樹木の根の斜面崩壊防止効果に関する実験的研究
坂部　高矢　（佐藤　高晴）　西条湖成層の古地磁気

生体行動科学コース
赤木　大輔　（坂田　桐子）　性役割態度の規定因に関する研究
阿部　珠英　（筒井　和義）　ウズラ視床下部ニューロンに対する脳内ペプチド，ガラニンの作用
井藤　早苗　（林　　光緒）　Post-lunch dip 前の時間帯にとる短時間の仮眠の効果
上野　有紀　（新畑　茂充）　簡便な頸部冷却装置が暑熱環境下における運動時の体温調節反応に及ぼす影響
長内　和泉　（関矢　寛史）　運動課題の潜在及び顕在学習
黒岩　京華　（黒川　正流）　対人関係における「別れ」の経験が社会的スキルに及ぼす影響
竹村　明子　（坂田　省吾）　ラットにおける複合刺激を含む弁別学習と脳内電気活動
田中　瑞穂　（岩永　　誠）　音楽の印象が感情反応に及ぼす影響
地京　慎哉　（山崎　昌廣）　中高年ジョガーのランニング障害要因に関する基礎的研究
土持　裕胤　（和田　正信）　ランニング運動における活性酸素と筋小胞体の機能の関係
筒井　明子　（浦　　光博）　自己観が選択後の心理に及ぼす影響についての検討
長瀬　敏男　（浦　　光博）　ごみ削減行動の規定因について
根岸美砂子　（小村　　堯）　体格指数ＢＭＩを用いた精神遅滞児および精神遅滞者の肥満について
野間　恵子　（浦　　光博）　大学生が逸脱者に対する拒否・排斥傾向を高める諸要因についての検討　－学校におけるいじめとの関連から－
松岡　麗子　（岩永　　誠）　中学生の友人関係形態がストレス反応に及ぼす影響
馬庭　泰子　（堀　　忠雄）　高齢者のライフスタイルと睡眠・生活習慣
三浦　克丈　（坂田　桐子）　自己概念が適応に及ぼす影響
溝部　亮子　（坂田　省吾）　固定比率値の変化がラットのサーカディアンリズムに及ぼす影響
南　　知宏　（生和　秀敏）　タイプＡ行動特性とコントロール欲求が無力感に及ぼす影響
矢敷　光世　（岩永　　誠）　テスト不安がパフォーマンスに及ぼす影響
山内　邦雄　（山崎　昌廣）　皮下脂肪の沈着パターンからみた男子学生の身体的特性
津田　剛士　（磨井　祥夫）　歩行時の下肢関節負荷に関する研究

お初お目にかかります　－新任教官紹介－

坂本　竜哉（生体行動科学コース助手）

回遊するサケやウナギ，そして最近はトビハゼなど魚をモデルとし，生物がどのように海洋，河川，陸上といった新しい環境に適応できたかを明らかにしようと研究をしています。私自身も，92年に東太平洋海洋研で大学院を終了した後，学術振興会特別研究員（東太平洋研，カリフォルニア大バークレー），学術振興会海外特別研究員（ハワイ大，メリーランド大），科学技術特別研究員と，職を転々とし，東京，カリフォルニア，ハワイ，東海岸，横浜と回遊（遊んでいただけではないかと思う）したあげく，10＋α年ぶりに広島に母川回帰してしまいました。サケは母川に戻ると生殖行動に専念しますが，私は独身ですし，研究，教育に専念するつもりです。とりあえず。

尹　光鳳（外国語コース教授）

1947年韓国ソウル生まれ。東国大学大学院（国語国文科）を卒業，文学博士を取得しました。その後，斉州大学と大田大学で15年に亘って韓国文学と民俗学の授業を担当してきました。

1993年に１年間，熊本学院大学で客員教授として韓国語を教えましたが，当時，日本文化，特に祭りの文化への興味が湧いてきました。今になって考えれば，それが広大に来る契機となりました。

私の主な研究領域は韓国文学と韓国民俗文化です。今まで，『韓国演戯詩研究』『韓国の演戯』『旅芸人と人形劇』を出版しています。現在は，『朝鮮後期演戯研究』を上梓準備中です。

今後，日本と韓国，そして中国における文学と文化を比較する研究に専念していきたいと思います。また，韓国語と日本語に表れている文化諸相に関する研究にも取り組んでいきたいと思います。

趣味は映画と演劇の鑑賞です。

長田　年弘（人間文化コース助教授）

1958年，静岡県，浜松市生まれ。早稲田大学政治経済学部経済学科を卒業した後，同大学大学院文学研究科に進学。1989年からオーストリアのザルツブルグ大学，西洋古典考古学（古代ギリシア・ローマ美術史）研究所に留学。４年間滞在し，1993年に帰国。以後，母校の早稲田大学講師などを経て，1997年より広島大学総合科学部に勤務。

西洋美術史，特に古代ギリシア・ローマ美術史を専門に研究しています。研究室には古代に限らず芸術関係の本がたくさんありますから，気軽に寄って下さい。

武田　紀子（人間文化コース助教授）

カナダ留学の後，本年４月に赴任いたしました。研究分野は，比較文学・比較文化です。

出身地倉敷と同じ瀬戸内の風光に恵まれた名勝鏡山の最新のキャンパスに位置し，まさに知の最前線に立つ総合科学部の一員とさせて頂き，幸いに存じております。

アメリカのプラグマティスト，C.S.パースの記号論に基づく文化研究を実り多いものにしたいと日々願う中，趣味の方も，読書，美術・音楽鑑賞，観測，書道，そしてインターネットと，領域の拡大に努めております。

窪田　幸子（地域文化コース助教授）

本年４月１日付けで，赴任いたしました。専門は文化人類学で，オーストラリアの先住民，アボリジニの研究をここ10年継続して行ってきております。現代アボリジニ社会のなかで，女性を中心にアイデンティティにかかわる語りがどのように変成されてゆくのかを追い続けています。生まれは東京で，学生時代を阪神間ですごしました。中国地方は初めてで，まだ西も東もわかりません。徐々に発見してゆくことを楽しみにしています。フィールドでのホットな体験を生かし，魅力的な文化人類学を学生のみなさんに味わってもらえるような講義をと努力しています。どうぞよろしくお願いいたします。

頭山　昌郁（自然環境研究コース助手）

謹　啓

清涼の候，益々ご清祥のこととお喜び申し上げます。

私儀，４月15日付をもちまして本学総合科学部自然環境コース勤務を命ぜられ，過日着任いたしました。つきましては，今後，微力ながら専心職務に努める所存ですので，今後とも宜しくご高配くださいますようお願い申しあげます。

鑑賞に堪えるほどの容貌ではございませんので，まずは略儀ながら書面のみをもちましてご挨拶申し上げます。

敬　白

田中　秀樹（生体行動科学コース助手）

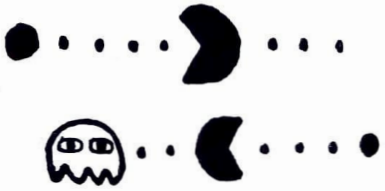
昭和40年，山口県，宇部市生まれ。鹿児島大学理学部生物学科で味覚の神経生理に従事し，卒業後，平成４年に広島大学生物圏科学研究科へ進学，行動科学を専攻。ヒトを対象に，覚醒期から睡眠期への移行に伴う意識変遷過程の脳波動態について検討し，平成９年３月に博士（学術）を取得。平成９年４月より，広島大学総合科学部に勤務しています。ヒトの意識というものに，興味をもっております。最近，やりたいことが多すぎて，体が２つ位ほしい気分です。

下村　哲（数理情報科学コース助手）

６月１日付けで，総合科学部数理情報科学コースの助手として着任しました下村哲（しもむらてつ）です。広島大学生物圏科学研究科博士課程を修了後，研究生として研究に励んでいました。

私の研究内容は，ソボレフ関数の連続性・微分可能性を調べることです。その際，ソボレフ関数のポテンシャル表示が有効な方法を与えてくれます。現在では，ソボレフの埋蔵定理の一般化，ソボレフ関数の境界極限値の研究を行っています。

趣味の時間は余り持てないのですが，いろいろなスポーツをして体力をつけ，自分の研究，学生への教育に全力を注ぐつもりです。どうかよろしくお願いいたします。



◇ 読者からの声 ◇

佐藤　正樹（人間文化コース　助教授）

『大衆食堂』

前号のこの欄に学生さんが文章を寄せ，研究室紹介の記事が有益だと書いていた。せっかくだから，それらの記事を充実させるために一つ提案したい。

総合科学部が標榜する理念の一つに「学際性」というのがあって，少なくともうたい文句としてはすこぶる評判がいい。けれども，わたしにとってはたいへんにやっかいな，あえていえばうるさい概念である。学問には途方もない伝統があって，これは新しい着眼点だと悦に入っていると，ゲーテがメフィストーフェレスに言わせているように，なんのことはない，もう百年も二百年も前にだれかがどこかに書いている。少しも学「際」なんかではない。ちゃんと伝統的な学問分野のどこかにもう登録されていることが多い。

総合科学部はたとえてみれば大衆食堂みたいなもので，各種料理がそろっている。洋食もあれば和食もある。中華料理だって出てくる。ビールやコーヒーさえある。これが「学際性」だなどというのは詭弁にすぎない。専門の料理屋にない，「和」とも「洋」ともつかぬ独自の料理が出せるかどうかが勝負だ。気づいてみたら，大衆食堂にしかないのは「お子さまランチ」だけ。たしかに和洋折衷，プリンまで載っている。けれども学齢期に達するころには飽きられる。

研究室紹介にぜひ加えてほしい。わが研究室の「学際」はこれだ，と。努力の甲斐もなく「学際」研究に疲れた人間からの切なるお願いである。

玉田　寛（学生係）

私は今年の４月から学生係で勤務するようになりましたが，平成３年４月から２年間（まだ総合科学部が東千田キャンパスにあった頃）庶務係で勤務していました。その頃，「飛翔」は職員全員に１冊ずつ配られていたので存在自体は知っていましたが，全然読んだことがありませんでした。

そこで，私が総合科学部を離れていた４年間のバックナンバーを読んでみることにしました。４年間の間にいろんなことがあって，以前総合科学部にいた時のことが大昔のことのように思えました。

その中で一番興味深く読ませてもらったのは48号に掲載されていたごみ問題の記事です。私が東千田で働いていた頃，センター試験の準備で教室等の清掃をした時にビラや紙コップ，さらに食べかけのパンや飲みかけのジュースまでが机の上や棚の中にあり，ものすごい量のごみがありました。その時によくこんな所で勉強ができるなあと思いました。今，講義室等を見るとまだ建物が新しくて，汚してはいけないという気持ちが働くのか，東千田の時と比べると少ないようですが，かなりビラ等が散乱しているように思います。これから「飛翔」に構内の環境問題（ごみ問題や駐車・駐輪問題等）についての記事をどんどん載せてもらって，少しでも多くの人に環境問題について考えてもらい，すばらしい環境で大学生活を送ってもらいたいと思います。

岡崎　里香（総科02　社会科学M06）

イギリスのブライトンで留学中の私の元に母からの小包が届き，中には日本食と共に飛翔が入っており，たいへん懐かしく読ませていただきました。（クラスメイトにも見せました。）

サセックス大のキャンパスは建物が茶色で統一されている点で広大を彷彿とさせる雰囲気です。緑が多く芝生に寝ころんだり，フリスビーで遊んだりと思い思いに楽しむ学生の姿がみられます。学内にはパブ，映画館，プール（泳ぐ方ではなくビリヤードの方），スポーツセンター等があり，設備が充実しています。映画館には当選前のトニー・ブレア氏が選挙運動の一環で来訪し，多数の学生の参加のもと講演しました。（私も参加）

図書館には，新聞閲覧室があり，朝日新聞を読んでは目まぐるしく変わる日本の状況，流行に驚いています。図書館の本は借りられる期間が長期（１ヶ月），短期（１週間），１日と３種に分類されており，需要の高いものは必然的に短期となっています。期日までに本を返却しない場合罰金が課せられます。返却カウンターにはレジがあり，罰金を払っている学生をよく見かけます。期日１日の本は借りた翌日の午前11時迄に返却せねばならずそれを過ぎるとまた罰金。一見厳しいようですが，本の回転も早く，又本の紛失もなく利用者にとっては有効なシステムといえるでしょう。私の在学中，広大の図書館入口に本の未返却者の氏名が公表してあるのを見ました。図書館の蔵書は学生・教官等の公共の財産ということを認識してない人が多いように思います。

サセックス大学での最終学期も間もなく終了し，帰国も間近でエッセイと悪戦苦闘しています。飛翔編集部の皆さんも大変でしょうが，異国で読む飛翔の面白さは格別でした。

今後共頑張って下さいね。

石原　高陽（卒業生）

飛翔編集委員の某教官からの突然の執筆依頼とともに送られてきた『飛翔』第52号。特集の一つ，「カリキュラム改革とその行方」を読み，今総科が学部創設以来の理想に向って大きく変わりつつあると感じました。

総科の掲げる理念の一つに，ある問題に対して様々な角度からアプローチできる人間を育てること，があると私は考えています。今回のカリキュラム改革の目玉である「パッケージ科目」は，まさにこの理念にかなうものではないでしょうか。「パッケージ科目」を受けることのできる09生以降の学生を，少し羨ましく思います。

もう一つ気になったというか残念に感じたのが，「教養ゼミ」と「外国語教育センター」，「情報教育研究センター」の設立です。どちらも興味深い制度改革なのですが，どこかの大学の二番煎じという感じがしました。総科がもっと早く，他大学に影響を及ぼすほどの大胆なカリキュラム改革を行うことが出来なかったのだろうかと思えて残念です。

特集の中でも述べられているように，制度・設備などのハードが整備されてもそれを活かすソフト（授業内容や学生の学習意欲といったもの）が充実していなければ今回のカリキュラム改革は失敗に終わってしまいます。教官・学生の皆さんには大きな責任がかかると思いますが，皆さんの努力によってこのカリキュラム改革が成功し，総科がますます魅力的な学部になることを大いに期待しております。

藤井　啓晶（人間文化コース２年生）

「人によっては勉強に時間を使いすぎて，真実を知る暇がない」（ユダヤの格言）。

僕たちは今，総合科学部で勉強していますが，それらはきちんと血となり肉となっているのでしょうか。ただ単に単位をとるためだけの勉強はしたくないと思います。また事実を知るのみで，その裏にある真実を見過ごしているという場合もあると思います。事実と真実は全く違います。事実というのはある事件が起こったというそのものにすぎませんが，

真実というのはその事件の背景なども含めたもので，事実のみを見ていては本当の事を見落とす恐れがあります。勉強で事実を知ることはできますが，真実は簡単にはいきません。

今，総合科学部ではカリキュラム改定など学部の再編成が行われていますが，僕たち一人一人が真剣に考えなくては，これは意味のないものになってしまうかもしれません。「失敗を極度に恐れることは，失敗をすることよりもひどいことだ」という言葉があります。これはチャレンジ精神の大切さを言っています。失敗を恐れるあまり新しい分野に踏み出せず，常識という殻にはまり込んでしまい，井戸の中だけでの生活にはまってしまうという事にはなりたくありません。失敗を恐れずに新しい分野に踏み出し，机上の空論ではなく，真実を見たいと思います。先日読んだ本の中に書いていたことと，それを読んで思った事を書かせてもらいました。「飛翔」の編集委員のみなさんも前例にとらわれない新しいものが出来るようにがんばってください。

丁寧な手紙を戴き，本当に有り難うございました。(海外からの手紙に至っては初めてではないでしょうか。嬉しかった。)

今後も飛翔は紙面に対する感想・抗議等をお待ちしております。巻末の住所あてにお送り戴ければ幸いに存じます。

～編集後記～

三木　直大
（編集長，人間文化コース　助教授）

『飛翔』は学生・事務・教官連合の学部広報誌と位置づけられていますが，これまで継続できてきたのは，とにかく学生編集委員諸氏の奮闘によるものだとの認識をあらたにしています。彼らがいなくては何もできません。その点でも掛け値なく『飛翔』のメインは，＜特集＞欄の＜学生企画＞です。今回はとりわけ授業日程の変更のために，学生編集員諸氏は前期試験の真っ最中に胃潰瘍になりかけながら取り組みました。そして今後の課題は，『飛翔』発行のための人的資源を如何に獲得していくかです。意見のある学生諸氏，メンバーになってやろうという学生諸氏の編集部への来室を心から希望します。最後になりましたが，お忙しい最中，寄稿して下さいました方々にお礼申し上げます。

宇佐美　広介
（数理情報科学コース　助教授）

学内の広報誌の編集に携わるのは２回目になりましょうか。１回目は理学部在任中にやったことがありました。「理学部通信」という安直（失礼！）なタイトルのものでした。それにひきかえ，総合科学部広報誌の「飛翔」というブッ飛んだタイトルはわりと気に入っています。特に我が学部の名前（及びその実体？）と似て何を言っているのか解らないところが……。

石橋　淳也
（生体行動科学コース　２年　学生編集長）

現場監督のふがいなさから（こんな一言で逃げるあたり，俺もズルくなった），芸達者な編集委員達の実力の「縮小コピー版」しかお届けできなかったことを，まず以って読者の皆様にお詫びいたします。また，企画倒れ・依頼のミスを続出させてしまい，関係者の皆様には本当にご迷惑をお掛けいたしました。

今号はたまり場をテーマに特集を組みました。たまり場から生まれるものを背伸びをしつつ追っかけてみました。それはそうと，たまり場が解体した後，個人はどこへ行くのでしょう？そこまでつっこめませんでした。

磯崎　由行
（自然環境研究コース　３年　学生副編集長）

例年にない大所帯ゆえか生来の懶惰ゆえか，采配を取るどころか己の位置も定まらず，相変わらず空転する記事と共に独楽のようにくるくる廻るばかりであった。振り返ればはて自分は何をしたろうかと疑問に思う事もあるが，何はともあれ私はこれにてお役御免である。今年度は後継者問題に頭を悩ます必要もない。毎年この調子で続けば飛翔も安泰なんだがなぁ…。

植原　暢哉
（生体行動科学コース　２年）

ちょっとパソコンに触れて，打ち込みをやってみたいなと思ったのがはじまりだった。ある時，打ち込みをやっていて，「んふぁ」と打ってしまった。真面目な文章だっただけに笑いが止まらなかった。それが一番の思い出である。

松永　孝治
（自然環境研究コース　？年）

飛翔に関わること，それが自分に及ぼす影響を知りつくすことはできない。ただ飛翔をしている自分がここにあると感じるだけである。そうして流れていくときの中で，優雅に足掻きながら記事のことを想う。「なかなかいいんじゃない。」そう思える自分自身。そして今日も日が暮れていくのであった。

第一部　完

田村　久
（09生）

今，矢野顕子の「Oui Oui」を聴きながら書いています。このように，編集室を物置と予習場所とＣＤを聴く場所にしか使っていない僕を世話していただき有り難うございます。そして，読んでくれたあなたも有り難うございます。矢野さんの歌は素敵です。７月２２日（火），もう少しで完成です。

編集委員

教官　：三木直大（編集長，人間文化コース助教授）・石倉康次（社会文化コース助教授）・宇佐美広介（数理情報科学コース助教授）
事務　：玉田寛（学生係）
学生　：磯崎由行（自然環境研究コース３年）・石橋淳也（生体行動科学コース２年）・植原暢哉（生体行動科学コース２年）・荻隆司（社会科学コース２年）・小林直樹（外国語コース２年）・田中芳典（物質生命科学コース２年）・田原和貴（人間文化コース２年）・西山恵美子（社会科学コース２年）・松永孝治（自然環境研究コース２年）・宮原千晶（地域文化コース２年）・安永洋介（数理情報科学コース２年）・渡邊論史（生体行動科学コース２年）・青松伴晃（１年）・田村久（１年）・古川恵里（１年）・松田理恵子（１年）・松村丞治（１年）・吉田健吾（１年）
すけっと：有村大士（物質生命科学コース２年，表紙・グラビア担当）
村上未知（物質生命科学コース２年，表紙・グラビア担当）
居候　：照屋　敦（人間文化コース　４年）

＊総人数を書き加えるのを止めました。
少しずつ手を借して下さった方々に感謝。

飛翔伝言板

●お詫びと訂正

飛翔53号の記事について，Ｐ９の「外国語科目」の中の「１：英語」の履修パターンの表記に一部誤りがありました。これは学生編集委員の編集上のミスであり，関係各位にはたいへんご迷惑をおかけする結果となりました。お詫びして訂正します。

以後，このような事がないよう，校正には十分気をつけますので，何卒ご容赦下さい。また，万一このようなミスを発見した方は，飛翔までご一報下さい。

●卒業生への通信

卒業２年目以降の方に対しては，希望者のみに送付することになっています。引き続き「飛翔」の郵送を希望される卒業生は，1997年12月末までに下記の住所宛にハガキでご連絡下さい。

〒７３９　東広島市鏡山１－７－１　広島大学総合科学部飛翔編集委員会

◆『飛翔』は年２回発行，春と秋に配布します。

学生編集委員・原稿募集

編集作業に興味を持った方，
　　実地経験を積んでみませんか

写真・イラストの得意な方，
　　あなたの自信作で飛翔を彩ってみませんか

海外などに旅行に行かれた方・留学生の方・変わった体験をされた方，
　　エッセイに投稿してみませんか

何となく最後まで読んでしまった方，
　　感想を書いてみませんか

とりあえず暇な方，
　　編集室に顔を出してみませんか

「面白くない」と思ってしまった方，
　　自分の手で飛翔を変えてみませんか

君と僕のお友達

飛翔では学生編集委員及び原稿を随時募集しています

グラビア２

総科周辺で
しばらく手の写真を撮った。

大切なものを守る手もある。

つつむものは つつまれている。

この人は 気付かなかった。

広がりは 愛情。

定位置の心地良さ

はずかしがりや。

そのうちなくなって忘れる。

屋根があると安心する。

だしおしみは だめ。

いつも ありがとう。

クリックは 選択を意味する。